

特集／農村開発と農村研究

山本陽三の遺産―現代の意味解釈への一考察

辰巳佳寿子

●高度経済成長期の農村を駆け抜けた社会学者

「いつの日から、『村』は経済学者や未
来学者どもの数字の泥にまみれてしまっ
たのか。交換価値に見合わないからと、農
ともには切り捨てられていつてもよいも
のだろうか。村の使用価値をどこに置き忘
れてきたのか、学者たちよ。」これは、故
山本陽三著『風と土と人』(参考文献②)
の序章「失われし村を求めて」の中の一
節である。

山本陽三教授(一九二六―一九七九年。
行年五三歳、以降敬称略)は、一九六三年
の記録的な豪雪や一九七二年の洪水によっ
て過疎化が進行した時期に、主に九州や中
国地方の農村が直面していた問題の現実的
な解決への道を模索した農村社会学者であ
る。日本経済が高度成長の中で経済合理
主義的立場から農業の国際分業論が強くな
る一方で、食糧の安定供給から国防論、さ
らには環境保全を提唱する論調に対して、
それを「曲物」(くせもの)と見抜き、正
面から批判した『風と土と人』は、彼が

亡くなる七年前、四六歳という最もエネル
ギッシュに各地の農村を駆けめぐっていた
時代に書かれたものである。

人間と自然の関わりを、人間の「生き
方」として捉え、農村と農業を「文化」の
領域で見つめ直すべきだというのが山本陽
三の生涯を一貫した視点である。学問的な
土台のもとで実際の研究を志向し「現実
の要請に応えられない学問は空疎だ」(参
考文献③)とも言っている。

本稿では、山本陽三の残した学問的及び
実践的遺産を、文献研究と元生活改良普及
員・研究者等へのインタビューから整理し、
日本の農村のあり方や途上国の農村開発に
おける現代的意味を検討する。

●高度経済成長期の農山村開発論

一九七四年に発行された『農山村開発
論』(参考文献①)は、喜多野清一(農村
社会学)、安達生恒(農政学・農業問題)、
そして山本陽三を中心に、総勢二五人の研
究者によってまとめられた。彼らは、当時
の日本の農業と農村社会および農民の現況
を「誰が見ても容易ならぬ」事態と意識す

る社会学者と農業経済学者であった。彼ら
の共通するフィールドは「農家生活」であ
り、農民側から農政・農業・農民組織・農
村社会を分析する手法をとっている。

ここでは、「開発」という言葉を使用す
るにあたって、再三の議論がされている。
ここでいう「開発」とは、成長や発展の過
程における、要素の斬新な結合、新規な方
式、さらには潜在的あるいは未知の可能性
(資源や能力等)の顕在化を意味している。
それは、資本が貪欲に自己発展してゆくと
めの地域開発や資本合理(＝資本の営利性
あるいは効率性)、権力や資本の手による
「される開発」ではなく、国民の生活内容
が安定的に充実した方向に進む地域開発や
社会合理(＝住民の必要性の原則)、地域
住民が主体となる住民自身の「する開発」
に質的に転換するための糸口を見つけ出す
という意味をもっている。それは住民の人
間疎外からの回復のための政策転換へつな
がる開発を意味し、いわゆる内発的發展論
につながるものである。

●ムラは生きています



特集／農村開発と農村研究

山本陽三の鍵概念は「農民」と「集落」であった。農民は、自然に対して主体的に働きかけをおこなっている人間であり、社会集団や社会的文脈から離された生物体としての個人 (individual) ではなく、社会集団のメンバーとして存在する個人 (person) である。また、農業と人間との関係は、人間が自然の一部として自然に対し働きかけ、自然の循環の一部を担うダイナミックな関係であり、社会の中の農民の砦となるのが集落であると指摘している。

集落 (ムラ) とは、同質的な人間が共通の生活目標をもち、そこから共通の規範を成立させ、服従すべき諸制度がもつ、固有の一つの文化をわかちあう共同体である (参考文献②)。明治以降のムラは次第に生きるための共同体の不可分性を喪失し、一片の郷土主義・地域根性・集落根性といった一つの風土 (ムラの精神) も失っていった。行政や権力は、農民支配の組織としてムラの和という共同体的強制力を活用して政策を浸透させた側面もある。しかし、農民としての権利が個人では守られないと感じたとき、初めてムラが復活するのだから、農民の生産と生活の共同、権力から身を守る抵抗の組織として、立派な強力な自治体として集落をよみがえらせることが可能である。集落を足場として将来の経営を考へるとき、はじめて新しい農業の可能性の展望も開かれてくるであろうと当時の山本陽三は考えていた。集落が自治組織とし

ての構造と機能を備えていることを「ムラは生きている」と主張したのである。

『農村集落の構造分析』(参考文献④) は、熊本県矢部町と福岡県糸島郡の集落調査の研究成果である。山本陽三の概念枠やラドクリフ・ブラウンなど構造学派の人類学への関心、コミュニティ論への関心のもち方は、鈴木榮太郎 (農村社会学) に類似していた。農村調査では、いつも対象を全体として観る必要性を強調していた山本陽三は、この研究では、社会構造を問題とした一連の集落構造分析を、農民のエートス、すなわち「農の心」にまで深化させている。

さらに、価値観の変遷の主導権は常に都市住民側にあり、よそ者として位置付けられるのは、官僚、評論家、マスコミ、学者も含む舌耕の徒であると、自らをも観察・批判対象として捉えている。そして、都市と農村が共存し、開発と自然保護の調和が保たれるにはよそ者が謙虚な心を持ち続けることが必要であるという含意も残した。

よそ者の役割を指摘すると共に、都市人が善と信ずるものが必ずしも農民にとって善ではなく、農民の美は必ずしも労働者の美と一致しない点を指摘し、絶対的な価値観はなく、ムラの論理を強調した。

では、なぜ住民は集落を必要とするのであるのか。山本陽三は、日本の農民は小農経営であるがゆえに共同体と不可分であった、という通説に対し、小農経営を欲するがゆえに共同体と不可分であると捉えた。

共同体に各自の生活のどこかの部分をセツトすることによって、各自の生活に具体的なメリットがはね返ってくるからであり、その源には「共有物」があり「シンボル」がある。シンボルとは共有物を共有することにより、各人の行動になんらかの規制を与えると同時に、その規制が共有者の生活にメリットを与えるものである。そして、このようなシンボル共有体の一形態として、農村集落や都市コミュニティを捉えることで、都市にも農村にも該当する「地域」の概念が普遍化できるとした。

●生活改良普及員との関わり

生活改良普及員とは、一九四八年に制度化され、一九四九年から全国の農村で「生活改善」、「婦人の自立」、「考へる農民作り」そして「貧困からの脱出」のために生活改善を促す女性の県職員である。彼女達は、農家出身者や農村出身者であるとは限らない。たまたま農家出身者であっても修学中は農業と関わることは少なかった。当時、多くの農家の女性達がもんべを着用していたのに対して、生活改良普及員は、洋服で自転車に乗って颯爽と農村を訪れていた。彼女達の活動は、よそ者が農村に入ってきた異文化を導入する行為とも捉えられる。

一九六〇年から二六年間、山口県の生活改良普及員であった藤井チエ子さんは当時の様子を以下のように語っている。「実家は農家ですが、農の『の』の字も知りませ



結婚式にて農民と話す山本陽三（右）（1978年3月、徳野貞雄氏提供）

んでした。山本陽三先生には、農村とは何か、集落とは何か、農村の構造とは何かを、本当に手取り足取り教えてもらいました。

新米の生活改良普及員の中には、農業やその地域をあまりよく知らないため、現地に入る時にとまどいを感じる人々も少なくはない。就任した当時、藤井さんも担当地域へどのようにアプローチしたらよいか躊躇したようである。「わからん、わからん、どうやったらいいかわからん」という不安を率直に山本陽三に投げかけたところ、まず農家の集いでの会話をメモする、その指導記録簿を整理して、山本陽三にみてもらうことが日課になった。この作業の往復と同時に、山本陽三は藤井さんと集落を一緒にまわって農民の話を聞いていた。

山本陽三の関わり方は、トップダウンで「教える」のではなく、共に学び考えるところというスタンスをとっていた。このプロセスの中で、生活改良普及員それぞれが自ら農村や農家へのアプローチを身につけていった。山本陽三は集落のボトムアップや農民をエンパワーするだけでなく、普及員自らがエンパワーするようにも働きかけていたのである。「私が現地に入って農家の意見を聞けるようになったのは、山本先生のおかげですよ」と藤井さんは話す。

山本陽三のまなざしは常に農民の位置にあった。生活改善のための料理講習会や家計簿講習会や実践の現場に頻繁に顔を出しながらも、主張はせず、ひたすら農民のな

げない会話に耳を傾けていた。山本陽三は「自分自身が勉強になるから僕は来ているんだよ」と話していたという。農民の声を聞くために開催された集会では、堅苦しく本音を言わない（言えない）ことも多々みられるが、講習会等の別の目的で集まった人々が団欒する中で、何気なく発せられた本音が、その人、その社会の深刻な問題であることもありえる。

●山本陽三の遺産—現代の意味

山本陽三が生きていたら、今年で八〇歳になる。都市化・過疎化・少子高齢化等によつて、かつての様相を表していない現在の農村の姿をみたら何と云うだろうか。そして、今遠くから、現代の私達をどのような表情でみているのだろうか。

日本の農村では現在、「昭和の大合併」を経験した地方自治体が、「平成の大合併」の終局を迎えつつある中で、さらに「道州制」が議論され、地域のあり方が模索されている。集落営農や地域福祉等が取り沙汰されるようになり、諸機能に係わる地域の範囲、集落の機能と集落外のネットワークのあり方が問われている。そのような中、「我々のムラが消えていってしまうのではないか」との不安をもっている人々は少なくない。

「農村社会学に期待するのは、そこに住んでいる人々が地域と自分自身の問題を解決していけるかというのが一つのポイント。

それから、もう一つのポイントは、区長さんや地主さんだけが『ああやれ』『こうやれ』と云ってトップダウンで押しつける方法ではなく、集落の一人一人が地域の将来を考えていかなければなりません」と、藤井さんはさらっと云つてのける。

山本陽三の哲学、姿勢、考え方、身のこなし方が、山本の死後、四半世紀を生きた藤井さんという一人の人間を通して今に還元され、それが単なる模倣ではなく、その人独自のものとなっている。現代の日本の農村の危機的な状態に対しても「自治機能をもつところは、今でもムラはしっかり生きていますよ」と、藤井さんは力強く反応する。

●途上国の農村開発への示唆

藤井さんは、山口県を退職した後、現在は、国際協力機構の生活改善プログラムに関わり、人材育成に寄与している。具体的な実践もさることながら、実践から習得した哲学を伝える努力も怠らない。今後、生活改善の方法論を学んだ途上国の女性達が活躍していくことで、山本陽三の原風景となった農の『風と土と人』を変容あるいは溶解させた日本の農村開発の手法が広がっていく可能性は高い。日本の経験に基づいた農村の変容過程が途上国の農村に直接適応可能であるとは限らない。しかし、農と工との相対的比較に関して、その媒体が市場である以上、共通する要素がある。



特集／農村開発と農村研究

近年、開発のスローガンとして、「豊かさとは何か」「貧困とは何か」が取り沙汰されるが、これらの概念も弾力的に捉えられるようになってきた。所得、財産だけでなく、健康、環境等の指標に加え、社会的な指標も加えられてきた。『農山村開発論』(参考文献①)では、可視的な豊かさは、天災や社会経済変動によって失われ、壊されることがあるため、真の豊かさは、こうしたものが失われ、いわばどん底に落ちたときに、立ち上がる力を持つていることであると主張しており、いわゆるソーシャルキャピタルの存在を指摘している。「地域の場合、住民の個々の力もさることながら、不利な環境や条件を克服していく力は、やはり住民の組織的な力を待たざるを得ない。農村の開発は伝統的な部落の崩壊や否定を前提にして考えられるのではなく、これをいかにして活かすかという立場で検討されるべき」と、最後に締めくくられているように、「住民の組織化」の促進や「地域の固有性や潜在力」の「ムラの機能と構造」の見直しが当時の日本の農村研究において行われていたのである。

その他の共通点は、住民の目線、住民が主体であること、住民の内面(価値観)にも目をむけること、組織化する時のよそ者の関わり方や姿勢等が挙げられる。そしてムラを中心としながら、外部との接触によってムラが主体的に動いていくこと、さらには環境への配慮を含めた様々な社会の重

なりを総体的に捉えていく視点の重要性は時空を超えて相通じるものがある。

近年、途上国の農村では、近郊への日稼ぎ、国内外への出稼ぎが急速に進み、農村の空洞化がみられるところもある。そのスピードが速ければ速いほど、農村の状況は「誰が見ても容易ならぬ」事態に陥らざるを得ないだろう。それらに、当事者やよそ者がいち早く気付き、開発をどう捉え、どう関わっていくのか、地域をどういう方向に促すのか等が、途上国の農村開発において問われている課題の一つである。

先進国といわれる日本で都市的な生活様式に慣れている人々が、農村研究や開発実践のために途上国に入る場合、「誰が見ても容易ならぬ」事態にどう接近するのか、よそ者としてどう振る舞うべきなのか、自らの論理を客観的にみられるのかなど、様々な課題が浮上してくる。そのヒントは実は我々の身近にあるのかもしれない。

山本陽三のよそ者としての関わり方は、「人々の生の声に真あり」という姿勢をもってムラと対峙していた。よそ者が、何気ない言葉に潜む潜在的な問題を指摘することで、農民達に重要なことを気付かせるという展開も可能であった。農民の実践から生まれた哲学や信念が、一般理論につながることもありえる。それをつなげるのが研究者の役割であり、常に、現実的な要請との狭間に身をおきながら、地域のあり方を模索していた農村社会学者であったといえ

る。

今から三〇、四〇年前に日本の農村を駆け抜けた山本陽三の試みの要素や残された課題は現在でも息づくものであり、その遺産の現代的意味は大きい。これらを現代にどう解釈していくかが重要であり、本稿はその一考察として位置付けられる。

(たつみ かずこ／山口大学エクステンションセンター専任講師)

《参考文献》

- ①喜多野清一・安達生恒・山本陽三編『農村開発論』御茶ノ水書房、一九七四年。
- ②山本陽三『風と土と人と』御茶ノ水書房、一九七二年。
- ③山本陽三『農の哲学』御茶ノ水書房、一九八一年。
- ④山本陽三『農村集落の構造分析』御茶ノ水書房、一九八一年。

〔付記〕本稿執筆におきましては、元生活改良普及員の藤井チエ子さん、山口県農林部の吉武和子さん、磯村豊子さん、広島修道大学日隈健王教授、山口大学小谷典子教授、熊本大学徳野貞雄教授よりご協力を得ました。ここに深謝の意を表します。